

びわ湖大津歴史百科 第3回ワークショップ

「滋賀の文化遺産を次代へ伝えていくために」

講師：西本 榊枝（文筆家、旅行作家）

内容：講演／見学（国宝・勸学院客殿と三井寺文化財収蔵庫）

日時：2016年11月6日（日） 13:30～16:30

場所：三井寺事務所（〒520-0036 大津市園城寺町246）／三井寺境内

【講演概要】

日本一の湖・びわ湖を県土のほぼ真ん中に置く滋賀県は日本の国が長い歴史を作る中で精神的、マネージメント的に中枢にあった土地と言っても過言ではなく、それを伝える文化遺産も歴史的事実も、それに関わった人物の業績も…、しっかり遺しており、この地に伝わる「地域資源」は超一級の事象、事物です。特に大津市は「古都」に政令指定されているように為政者が素通りできないほど地理的にも重要な町でした。にも拘わらず、歴史遺産、文化遺産とされる素材自身が十分輝き得ていない部分があります。何故なのか……。

昨年、文化庁の「日本遺産」に認定された「びわ湖とその水辺の景観～祈りと暮らしの水遺産～」は、滋賀・大津の文化の厚みをあらためて感じさせるものでした。同時にその内容は日本の文化を凝縮させたものであるとさえ感じました。これを次代へ伝えていくために何をどうしなければならないのか、具体的に考えてみたいと思います。

【講師プロフィール】

西本榊枝（にしもと なぎえ）

文筆家（旅行作家）。島根県出身。神戸大学教育学部卒業。3年間の教職生活の後、厚生省（現環境省）立案の〈東海自然歩道〉をテレビ番組でレポート。同名本を大阪創元社から出版したのを機に旅を語る現在の職業に。「山陰」「山陽」「奈良」他、旅の案内書や「小京都」「福井の宝」「花」等々の紀行集、詩集などの書籍を出版。滋賀関係では近江の文学風景を綴った『鳩の浮巢』『湖の風回廊』を刊行。滋賀県での仕事…びわ湖ビジターズビューロー理事 他

■挨拶（総本山園城寺執事長：福家俊彦）

私共は「大津市浜大津・石山地区文化遺産活用実行委員会」として今年度、文化庁の補助金を頂きまして事業をさせて頂いています。滋賀県は皆さんご存知のとおり非常に文化遺産・文化財が多い県であり、また大津市も屈指の文化財が集まる市であります。所有者というのは一時的にわれわれ社寺になりますが、この地域に住んでおられて生活をされている方、やはり文化遺産というのは共有財産であると私共も思っておりますので、それを上手く地域に活かして、また他所の地域・外国の方などもお迎えをして大津市の文化なり日本の良いところを伝えていきたいと考えております。そして自分たちの子供、孫の時代にも代々伝えていきたい、というのがこの事業の主旨でございます。特に、今年は石山寺さんと私共三井寺とが核になり、皆さんに文化遺産を紹介して知ってもらおうという機会を設けております。

西本先生は、「びわ湖トラスト」という琵琶湖の自然・環境を守るNPO法人で以前から活動を続けておられます。また『湖の風回廊』では滋賀県に関連のある文学作品を中心に書かれており、そのなかで「人が風景を守り、風景が人を育

てる」という言葉をお書きになっておられます。まさに、滋賀県の場合は琵琶湖を中心として長い歴史のなかで培ってきた景観・風景・自然、これがやはりわれわれにとっては何よりの財産であり生き甲斐になるものであると思っていますので、今日のお話のなかではそれを次代にどう伝えていくかということをお話し頂けると、私共も非常に期待しております。

西本先生のご出身は島根県・松江と伺っておりますが、松江と滋賀県というのは実は少し関係がございます。明治の話になりますが、当時松江の県知事（県令）になられたのが「籠手田安定」という方なんです。今日松江城の天守閣は国宝として残っておりますけれども、本来ですと明治維新のときに廃城になって無くなってもおかしくはなかった。それを籠手田さんが県令になられてから、保存活動に拍車をかけ、維持する会を作られたことで、今日の国宝・松江城が伝わることになったわけです。籠手田さんはその後、実は滋賀県の県令になられます。そして彦根城の保存をはじめ滋賀県のいろいろな文化活動に尽力されました。平戸藩士ご出身で、当時としては少し変り種の知事さんでした。現在大津市役所の裏に弘文天皇陵がございますが、これも国に働きかけて大友皇子を追諡し、御陵を定められたのがやはり籠手田さんでした（松江の県令になる前、滋賀県判事の頃）。そういう意味でも、文化的な行政・業績の非常に多い方でして、後々に三井寺金堂近くに顕彰碑が建てられることになります。

やはり、こういった人物が何人か居られないと、文化遺産を伝えていくということも難しいとは思いますが、われわれ一人一人がそういう思いを持ってこれからの考えに活かしていければと思っております。

■講演（講師：西本柳枝）

ご紹介頂きました、西本柳枝と申します。旅を書いたり喋ったりする仕事をしております。滋賀県では、文学作品をきっかけにして記事を書くというような仕事をさせて頂いておりますが、その取材で県内各地を歩き、滋賀の素敵な風にいろいろと触れさせて頂いております。今日は「びわ湖大津歴史百科」のワークショップということで来させて頂きましたが、「滋賀の人間ではない私が、滋賀の皆様へ滋賀のことを語るといのもどうなのよ」という思いがちょっとあります。だからこそ滋賀・大津の町に期待するものも大きくて、今日はお邪魔させて頂きました。

はじめに

「滋賀・大津の町に期待するものが大きい」といきなり申ししてしまったんですけども、近江人ではない私なんかいたしますと、文学や歴史、要は本の中でしか知らなかったもの——たとえば三井寺さん石山寺さん、比叡山や安土城、またそれに繋がる信長や光秀——そういう歴史上の人物・事物が現実のものとして目の前に普通に在る、それが滋賀という土地なんです。歴史も風景も、味覚も、素晴らしい文化そのものが日常の中に溶け込んでいる町。だからでしょうか、他所の土地では大変な宝だと認識されているものが、滋賀では見慣れた風景になりご自分（住人）たちが文化的環境に居ることが当たり前になってしまっているのかな、と思います。瀬戸内寂聴さんがまだ瀬戸内晴美さんと仰っていた頃に書かれた随想集の中で「大津の人たちは、自分の住む町がどんなに歴史の宝庫であり、日本の文化の根源かということを忘れていないか」というような一文がございます。これは昭和49年、高度経済成長をどんどん昇っている頃に書かれた感想ですし、「さすがに近年はそこまで無関心ではないよ」と思うんですけども、でもやっぱり大津の東海道沿いの町並みなんかを歩いていますと「ここ本当に素敵だな、なんて良い空間なんだろう」と思う一方で、「この空間ってもうちょっと磨いたらもっと素敵になるのにな」と思うことが今でもあります。

また、大津市が平成15年10月10日に全国第10番目の「古都」に政令指定されたことを、滋賀県民・大津市民の方でもご存じない方がいらっしゃるようです。「古都・大津」というのは決して観光のキャッチフレーズではないということ、私たち知っている者が、——他所の町の人たちには勿論ですが——大津の御子たちにちゃんと伝えておかねばと思っています。それくらい大津というのは素敵要素をいっぱい持っている町なんです。私の場合、大人になって大津とこうやって関わりが持てていることに喜びを感じておりまして、だからこそ「大津の町が日本人の一層の憧れの地になるといいのにな」という思いがあり、その思いも込めて本日のタイトルを「滋賀の文化遺産を次代へ伝えていくために」というふうにさせて頂きました。近江・大津の宝を次の世代にきちんと渡していくために私たちは何をしなければいけないのか、というようなお話にしていければと思います。

ものがたり観光

突然ですが「ものがたり観光」という言葉はご存知でいらっしゃいますでしょうか。たぶん3～4年前から特に言われるようになったんですけど、「観光にはストーリーが必要だ、物語がないといけない」ということを観光関係の方がよく仰います。私も旅の仕事をしているものですから、「ここに物語作っていききたいけど、何か物語できませんやろか」というご相談を受けることがあります。そうすると私としましては、「物語ってどんなことをイメージされていますか」と逆にお聞きしてみるんですけども、皆さん「ストーリー」「物語」という言葉に引張られてしまっている所為か、「何かそこで、人が興味を持てる話がないといかんのちゃうかな」と思っている。つまり、「何か物語があれば人が来てくれる」「人が来てくれそうな物語を作らなアカンなあ」と思っている。「でも、そうじゃないんですよ」と私は思います。「ストーリー」というのは暮らしの中に在るもので、それを土地の人たちが語ることだと思います。

近江の日本遺産

昨年の4月、文化庁が「日本遺産」なるものを全国で18件選び、認定いたしました。今年も、申請項目67件のうち19件が認定されて、とりあえずこの二年で37件の日本遺産が誕生しています。その申請条件の中にも「ストーリー性が有ること」的なことが謳われておりました。その結果、昨年18件の中に滋賀県の「びわ湖とその水辺景観～祈りと暮らしの水遺産～」というのが入りました。比叡山や琵琶湖を意識して滋賀の水の文化を謳いあげた結果、認められたものだと思います。近江の魅力の要素は、大きな括りとしてはやっぱり「水」だと思うんです。水が人々の暮らしに影響を与えてきた、ということで、「水と暮らしの文化」「水と祈りの文化」「水と食文化」としてそれぞれの地域がセレクトされています。具体的にはまず「比叡山延暦寺」があります。それから麓のここ「三井寺」さん、「日吉大社」さん。彦根の「玄宮園」と「お浜御殿」、お浜御殿というのは松原にある井伊家の下屋敷です。それから米原の「醒井宿」と「伊吹山の西麓の地域」、これには春照の太鼓踊も入っています。「東草野の山村景観」「朝日の豊年太鼓踊」、それから「近江八幡の水郷」「沖島」「伊崎寺」「長命寺」、東近江市の「伊庭の水辺景観」「五個荘の金堂」、高島市の「白鬚神社」「海津・西浜・知内の水辺景観」「針江の水辺景観」「大溝の水辺景観」、安曇川流域に残る「シコブチ信仰」等々です。

この日本遺産の第1回登録認定というのは、あまり準備期間も無く、結構大急ぎでの募集・申請・審査・発表でした。これは東京オリンピックが開かれる2020年を目的に、100件程度を「遺産」として認定するという文化庁の計画のようです。「近江の魅力としてここを外すわけにはいかないよな」というものがちゃんと入っていて、良かったなとは思いました。ちなみにこの日本遺産ですけれども、文化的なものを選ぶわけですが、物件については地元から「申請」

されたものを検討して「認める」ということです。その検討も文化審議会のようなものではなくて「有識者会議」で検討して決められます。ですから、呼び方も「選定」ではなく「認定」ということになります。五個荘の金堂地区や近江八幡の新町通り、坂本の里坊の町が「重要伝統的建造物群保存地区」とされていますが、あちらは文化審議会が「選定」したものです。で、ついですが、国宝や重要文化財というのは否応無く「指定」です。要は、「日本遺産」も「重伝建」も「国宝」も文化財ではありますが、その経緯や性質が微妙に違うものですから言い方・呼び方も微妙に違ってきます。

自前の文化財

近江の豊かな観光資源・地域資源というのは、日本遺産に認定された所やモノだけでなく——つまり何処かからお墨付きをもらったという所だけではなくて——滋賀県内至るところに色んなものがあります。で、「どれだけ素晴らしいものがあるか」を計るときによく言われるのは「国宝・重文の数」で滋賀県は日本で4番目に多いということですが、これは数の上での話であって、「自前の文化財がある」ということでは恐らく滋賀県が1番です。そのところは滋賀の方たちはちゃんと分かっていて誇りに思っていたら良いな、といつも思うんですけども。確かに数字の上では東京、京都、奈良に次いで滋賀は4番目ですが、上の3都府県は国立博物館のあるところ。文化財の管理というのは、セキュリティ、温度・湿度の管理、文化財の歴史的な調査・研究など色々な要因によって、全国の社寺や古い博物館から沢山の文化財が「国立博物館」に預けられたり所有権が移ったりしています。だから、数字的には上位3都府県の件数が多くなっています。滋賀県の場合は残念ながら、他所からわざわざ預かれるほど設備の整った博物館というのが今のところありません。県内の文化財が中心です。つまり、滋賀県の4位というのは、本当に自前の文化財の数なんです。その証拠、というのも言い方が変かも知れませんが、「登録有形文化財」——予算がつけば重要文化財に格上げされるであろう文化財——の件数は滋賀県が一番多いんです。

庭園と近江人の風流

国の「名勝指定」の庭園というのが、全国で200件程あります。1位は当然のごとくに京都府で、約50件あります。2位が滋賀県で、20件程あります。これも私、別に競争するつもりではないんですけども、私がいつも「滋賀県のお庭はすごいなあ」と思いますのは、その数ではなくて分布や有り様なんです。京都府の名勝指定庭園50件は、9割以上が京都市内にあり、しかも大方がお寺のお庭です。ですけども、滋賀県の場合は固まっておらず、県内のあちこちに散らばって在るんです。池の沢庭園などは朽木のあんな山奥にも拘らず、鎌倉時代からの庭園が残っていて名勝として指定されています。さらにお寺だけではなく「神社庭園」や「民家庭園」というものもあります。要は、お庭の散らばり方・有り様を見ているだけで、近江の人全体の精神的な背景が伺えるような気がするんです。

このことは、取材で県内を歩いているときに実感として分かります。集落を歩いていますときに、「庭園」という大袈裟なものではないけれども、玄関先の小さな前栽かなんかで、思わず立ち止まってしまうような空間を持っていらっしゃるお家が結構あるんですね。植木も良いし、ちょっとそれにあしらってらっしゃる草花も良いし、置いてある灯籠なんかも新しいんでしょうけれども何とも言えない良い風情を出していらっしゃる。お家の方に「素敵ですね」と言いますと、「手入れはおじいちゃんがしてますよ」とか「お父さんが篝やってます」と仰るお家が大半なんです。庭師さんではなく、普通の暮らしの中でこんな空間を作り出すセンスを持った人たちがいらっしゃる。司馬遼太郎さんが『街道をゆく』という本の中で、五個荘の家を見て、「近江という地の、文化の土壌の深さに感じ入った」ということを書かれています。ですので、全くその通りで、私なんかはよく「近江の人には風流のDNAが有るんですね」と言ったりもする

んです。それぐらい、長い長い時間をかけて積み上げられた歴史・文化が体の中に入っている人が多い土地だなと感じます。

近江のストーリー

「びわ湖とその水辺景観～祈りと暮らしの水遺産～」が日本遺産に認定されたわけですが、申しましたように、これは近江の魅力を集約している非常に納得できるものでした。この日本遺産に認められた近江の各場所・近江の信仰、そういうものを見ておきますと、ここに自ずと物語が出来てくると思うんです。「何か物語できませんやろか」って、もう出来てますやんって思うんです。

たとえば、さっき申しました「シコブチ信仰」なんですが、湖西の朽木とか高島の山というのは、昔、奈良や京都の都を作りますときに——神社、お寺、役所などのために——木材を切り出す山があったところなんです。その切り出した木材は、筏にして、朽木の場合なら安曇川を流して琵琶湖に入れ、そこから奈良・京都に運んでいたわけです。その筏師さんたちを守ってくれるのが「シコブチさん」と呼ばれた神様(?)でした。安曇川に筏流しがなくなってしまった現在でも、このシコブチ信仰は地元の人たちによって大切に伝えられています。「シコブチさん」なんていうのは本当に名前からしてもストーリーが有ると思いますし、好奇心が膨らんでくると思います。

「水と食文化」に繋がる湖国の生業ということで、「琵琶湖の伝統漁法」も日本遺産に認められました。「エリ漁」とか「オイサデ漁」とか、近江を知っている私たちはよく知っている漁法なんです、これは琵琶湖独特の漁法なんです。琵琶湖の漁法というのは「待ちの漁」と言われていますように、魚の習性を利用して人間がじっと待って漁をする、というのが基本とされています。沖島の漁師さんが「獲り過ぎないのが琵琶湖流です」と仰ったことがあるんですけれども、本当に近江人の悠然としたものを感じる漁だなと思います。

これらの場所や項目をお聞き頂くだけでも、どれも近江を物語っていると感じられると思います。近江の方ですと、これらの地名や社寺なんかの名前を聞かれれば——たとえば他所の町のご友人・ご親戚を案内して差し上げるとき——色んなことを頭に思い描かれると思うんです。「語る、語りたいたいものがある」それがストーリーだと思うんです。近江の魅力を磨いていくことになると思います。「これなに?」「これどういう所?」と聞かれたら、やっぱり自分の知っている比叡山とか琵琶湖とか、さらにその畔で暮らす人々の暮らしを語らねばならないですから、それが「物語」「ストーリー」になっていくと思います。物語とはつまるところ、その土地の歴史・文化であり、それを語る人がいて成り立つものです。土地に伝わってきた風習・食べ物・人々の暮らし、現在残されている風景もそこで暮らす人間もすべて物語の要素を持っています。その要素に気づいて、引き出して磨いてやる、それがストーリーになるのであって、またそれを出来るのは地元の人しかいらない。それが、他所から来た人たちの心に届いて、その要素に出会いたい・触れたいと思って実際の土地を尋ねてくださる。そのときに「物語観光」というものが実感となり、また日本遺産というものも生きてくるのだらうと思うんです。さらにいえば、近江に来てくださった方たちが「近江って良かったね、素敵だったね」と感じて語ってくださる、そのときに素敵要素が「近江の魅力になって認知された」と言えると思うんです。

日本遺産と世界遺産の関係

そもそも、なぜ「日本遺産」というものが考え出されたのかと言いますと、地方創生という視点から、貴重な文化遺産を保護するだけでなくそれを積極的に活用していこう、つまり地方の素晴らしいものを埋もれたままにしておくのではなく観光客誘致に結びつくようにしていこう、ということがありました。さらに、日本遺産の発想の原点をもう少し

遡りますと、「世界遺産」の登録があります。今では日本でも世界遺産が増えてきて、今年の7月時点で文化遺産が16件、自然遺産が4件、合計20件が登録されています。登録されるということはその価値が世界的にも認められたわけですから「良い事には違いない」、にも拘らず、最近では「犬も歩けば世界遺産にあたる」と言われ——そんなに多いわけは無いのに——揶揄されるようになってきています。世界遺産の値打ちが感覚的に目減りしてきているのかなと思うんですけども。でもやっぱり世界遺産に登録されることはスゴイことですし、観光客が増えるということもありますから、文化遺産のある町では世界遺産登録の推薦をもらうべく頑張るようになられました。滋賀県においては、比叡山が1994年に京都の社寺とともに登録されています。また彦根城がいま暫定リストとして挙がっています。

2013年、神奈川県の鎌倉が、世界遺産登録に大きな期待が掛かりながらも登録不記載になりました。そのとき、「世界遺産には成れなかったんだけど鎌倉を支援していけないか」というようなところから考え出されたのがこの「日本遺産」——まあ、これだけではなかったと思うんですけども——だったと聞いております。ちょうど、海外に向けて日本の観光をアピールしていこう、それに伴って「インバウンド（外国人訪日旅行者）」を倍増させよう、という政策も打ち出されました。ちなみにですが、確かにこの「ビジット・ジャパン・キャンペーン」以来、訪日観光客の伸びもすごくて、つい先日には「訪日観光客が2,000万人を超えた（10月30日）」という発表がされました。2003年の年間訪日客数が520万人程でしたから、13年間でおよそ4倍の増加となっています。とにかく、訪日外国人を増やそうという政策のなかで、鎌倉だけでなく世界遺産の暫定リストに記載されている文化財を始めとして日本のなかで埋もれている文化財を「日本遺産」という名前で発信していこう、ということになったわけです。

ただ、世界遺産の場合は「保全」が目的であり、「観光開発」を目的としているわけではありません。むしろ「安易な観光地化は保全を妨げる懸念がある」と謳っています。日本遺産も、土地の文化というものが私たちの中に意識化されていく、という点ではこれはこれで良かったなあと思っていますが、ただ近年は、経済が観光というものに群がろうとする傾向になってきています。日本国自身が観光立国を目指していますし、観光振興というのも経済ですから、「観光」に力を入れるというのは決して悪い事ではありませんし進めて行く必要はあると思います。ですけどもやっぱり経済効果を考えるあまり、「とにかく人に来て貰う」ことばかりを考えてしまうと、落とし穴に落ちてしまわないのかなと懸念したりもします。

観光振興と地域振興をつなぐもの

経済優先で突き進んでいきますと、土地の文化を壊してしまう場合もあると思うんです。世界遺産の場合でも、登録されたことで観光客が増加し、結局保全を妨げるという理由で登録取り消しが検討されている所もあります。実際に今までで2件、登録抹消になっている所があります。ドイツのエルベ渓谷の場合は——観光客というよりは土地の人たちの利便を考えて——大きな橋を架けちゃって抹消されていますし、オマーンのアラビアオリックスの保護区は「保護するよりも石油を掘りたい」ということで開発を優先し、登録が取り消されました。それからウズベキスタンのシャフリサブスの歴史地区、ここは過度な観光開発を行ったために「危機遺産」に指定されてしまいました。富士山も2013年に世界遺産登録されていますが、これは条件付きなんです。環境対策レポートを、山梨県・静岡県は今年の2月1日にイコモスへ提出したと思うんですが、どうやら2018年12月の再提出を求められたようです。ですから、観光開発とか色んなことを考えながらも、その土地の文化を守っていかなければならない、ということなんです。

経済が観光に群がることを防いで、真に文化が文化として輝いて、それが観光になっていくためにはどうすれば良いのでしょうか。言うは易し行は難し、ということになるんですが、とにかくとにかく「一般市民の意識化」が重要だと

思います。経済を優先させるために、伝え継いで来た文化に「ちょっと我慢してもらおうか」とか、「観光客が多くなってきたから駐車場の整備もせなアカンし」ということで何処かを削ったり潰したり、観光業の方が自分たちのしたいことを強引に押し進めたり、そんなときにもちゃんと「NO」が言える市民の高い意識が必要だと思います。そして私はそれ以前に、「地域振興というのは経済のためではなく、住民の暮らしのために先ず成されるべきだ」と思うんです。地域振興というものがきちんと成されていれば、観光振興を図っても、文化は文化として伝えることが出来ます。

景観作り・町作りで行政側から「規制」をかけていくということがよくありますが、規制で人を動かしている間は素敵な町にはならないと思っています。去年だったと思いますが、京都の仁和寺の前にガソリンスタンドとコンビニが出来ることになったときに——景観に配慮したデザインの建物にするということで建築許可は出ていたんですけども——市民の皆さんが「あの場所にそういうものは相応しくない」と反対されて、結局この話は流れたようです。規制ではなくて市民の意識を高めるというのは、こういうことだと思うんです。市民が諦めないで「NO」という、市民の関心の高さ、文化への意識、つまり「文化度」だと思うんです。市民の文化度が高ければ、経済・観光・文化はうまくお互いに高め合っていくことができると思います。

近江人の文化度とその根幹を成すもの

たとえば「水と暮らしの文化」でいえば、高島市の針江の「カバタ」が日本遺産に入っていますが、湧水を集落の人たちが上手に使い、しかもそれが人間の暮らしのことだけではなく最終的に琵琶湖に負担をかけないような暮らしになっている。この「湧水を利用する」というのは針江だけでなく、滋賀ではあちこちで見られます。皆さん水路とか湧水をとっても大切になさっています。水を大事に使うという暮らし方は、つまり隣人・近所の人たちと上手に暮らしていくということでもあるわけです。一緒の水を使っているということは自分勝手な暮らしは送れないんですね。隣のことを考え、集落のことを考える、そういう暮らし方をした、それが近江——特に湖北で私は強く感じています——の風土のように感じています。それが大きく大きく広がって近江の文化・風土になり、近江の人たちの気質になっていると思います。地元の皆さんはあまり思われなくてもわからないですが、「何気ない気遣い・気配り」が日常にあるのが、近江の魅力のひとつだな、と私は思っております。繰り返しますが、近江の文化というのは「琵琶湖と共にある暮らし」であり、それが近江の魅力の根幹を成していると思います。で、以前そんな風なことを言いましたら、琵琶湖に接していない町の方に「ウチは琵琶湖遠いですから、琵琶湖と関係ないです」と言われたことがあるんですけども、——確かにご自分の気持の中では琵琶湖と関わっていらっしやらない、かも知れませんが——どの町も琵琶湖には繋がっているとします。琵琶湖に集まる水は、全部滋賀県の平野を通ってきたものです。滋賀の町を見てきたものだと私は思っています。「地形」がその土地の文化を作るというのは当たり前で、滋賀県においては琵琶湖があって、そこから発する湿気が近江を覆っていて、それが近江の文化・近江の人の性格を作ってきているということは滋賀県内のどこへ行っても感じます。近江の土地というのは結構湿潤な土地なんです。大きな琵琶湖の湖面から蒸発する水というのは、結構な量があるんだそうです。それが程よい潤いになって、近江の乾燥を防いでいると言われます。たとえば、京都というのはとっても蒸し暑いと言われますし——実際に蒸し暑いんですが——彦根と京都の湿度を比較しますと、年間を通して彦根のほうが京都よりもウンと高いんです。その差は平均8%高くなっていますが、琵琶湖の風が彦根を蒸し暑い町にしていないわけです。それから山のほうにも滋賀県の町は広がっているわけですが、琵琶湖周辺の陸地の気温も琵琶湖のお陰でおだやかになっているようです。データを見ますと、湖岸周辺の町というのは内陸の町より温暖な気候になっています。蒲生町と彦根の温度を比べたものでも、彦根のほうが冬は少し暖かく、夏は少し涼しいようです。また琵琶湖

琵琶湖が発する湿気についていえば、長浜の縮緬、愛知川とか能登川辺りの近江上布、昔の近江八幡の蚊帳などの繊維作りが近江の産業になっていったのも、それから湖北・木之本の三味線糸・琴糸なども、やっぱり近江という地が程よい湿気のある地だったからです。これが乾燥した土地であつたら、縮緬にしても麻にしても作っている段階で糸が切れてモノになりませんし、三味線・琴糸にしても良い音の出る糸は作れないようです。琵琶湖が発する湿潤な空気、昔の人というのはそういうことをデータの的には分からなかったんでしょうけれども、経験的に、ここの土地に一番合った暮らし方を見つけて、身につけて、暮らしの文化というものを築いていったんだと思います。

昭和の旅ブーム

今は滋賀県も観光にウンと力を注いでいらっしゃるんですが、30年程前までは滋賀の観光は大変地味でした。人を感動させる要素はいっぱいあれどそれが人を惹きつける力になっていなかった。何故なのか。それは始めに申しましたように、近江の場合はすばらしい文化そのものが日常の中に普通に溶け込んでいますから、見慣れた風景になってしまっていたんじゃないかなと思います。ただ、私個人的には、その頃に滋賀が注目されてなかったのはすごく良かったと思っています。

土地々々の魅力を追いかけて、日本に旅ブームがやってきたのは昭和40年代後半～60年代にかけてだったと思うんですが、その頃の滋賀県というのはさほど「観光」というものに力を入れてらっしゃらなかったと思うんです。地元もそうでしたし、旅行会社や我々マスコミもあんまり滋賀県に注目していなかったと思います、お隣に京都なんていう大観光地がありましたし。で、比叡山にしても、当時日本国民は「京都」だと認識していた人が多かったんじゃないかなと思うんです。比叡山が世界遺産に登録されましたときも「古都京都の文化遺産」という登録名で括られたわけです。しかしそのときに滋賀県が「比叡山は滋賀県です」というアピールをされました。あれはとっても良かったと思います。あのときに、比叡山延暦寺が滋賀県にあるんだと気が付いた人は、全国で随分多かったと思うんです。私の東京の記者仲間で、旅行を書いている記者でさえ「比叡山って滋賀県やったんやな」と言った人もいましたから・・・、とにかく30～40年目というのはそんな感じだったと記憶しています。

「要素」から「魅力」へ

現在でも、滋賀県は観光的にそう派手な県だとは思いません。毎年、民間の会社が県別の地域ブランドについてのランキングを発表しています。認知度、魅力度など77程の項目で、3,700人程の消費者にアンケートをとってランク付けされるものなんですが、つい先だって、2016年の結果が発表されていました。それを見ますと、滋賀県は33位でした。昨年は41位でしたから、少し上がったことになります。こういう数字は関係ないとは思いますが、「これほど素晴らしい滋賀がなかなか認知されないのは何故なんだ」と考えてみることは必要だと思っています。基本的に「人を感動させる要素と、魅力というのは違うものだ」と認識しないといけないと思います。どう違うかと言いますと、「人を感動させる要素」といっても、人が関わって磨いていかなかったらその要素は「魅力」になっていきません、つまり魅力というのは人が関わってこそ出てくるものだと思います。ですから、極端に言えば、元々そこに感動させる要素がなくても、人が関わって磨いていくことで魅力のモノ・場所にしたりすることは出来ると思うんです。近年では特にそれを実感します。今まで誰も見向きもしなかったようなものが突然注目される、昔のまんまの寂れた町が突然人気の町になる。

大阪に中崎町という町があります。大阪イチの繁華街・梅田から歩いて30分くらいのところなんですが、大阪大空

襲で奇跡的に焼けなかった地域で、古い長屋がいっぱいあるいわゆる下町です。商店街もあることはあるんですが、わざわざ他所の人がそこへ行って買い物をしようかなと思うような商店街ではなく、人通りも少なく寂れる一方だろうなというような所だったんですけども、今すごい人気の町になっています。「これではいけない。この町が大好きだ」という地元の方や地元の企業さんが中心になって、学生さんたちを巻き込んで「町のことを考えよう」というような会合を開きだされて——今ホームページなんかもち上げてはりますから見て頂いたら良いなと思いますが——それで魅力の町になって、賑わいの町になってきています。中崎町を歩いていますと、本当に「人の知恵こそ錬金術だ」ということをつくづくと思います。歴史や文化財、味覚、自然、そういった宝物がただここに有るだけでは「魅力」にはならない。人が関わって魅力にしていかなければ、いつまでも素材のままです。

滋賀の皆様はご存知かと思いますが、大正時代にはじまって太平洋戦争が終わるまで、八日市には飛行場がありました。——戦後、飛行場はなくなったんですけども——飛行機を敵機に見つからないように隠しておく「掩体壕」というものが八日市の布引丘陵あたりにいっぱいあって、今も15基残っています。戦後71年になりますが、それはもうずっと藪の中に埋まったままです。近年、地元の方たちが「この歴史を伝えておかなきゃいけない」ということで調査を始めて、それを発信すべく見学会を開いたりされるようになりました。藪の中で70年間眠っていたものに人が関わられた結果、近江の大切な歴史遺産が日の目を見るようになりました。実は私も見学会に行ったんですけども、見学者に若い人たちがたくさん来られていたのには本当に吃驚しました。勿論地元の方も多かったんですが、大阪や和歌山、それから戦中をご存知の横浜在住の方も来られていました。つまり、東近江の方たちは八日市の観光のためになされたことだったんでしょうけれど、結果として、日本の歴史遺産を伝えるという役割も果たされているなあと感じました。「誰かがやるやろ」ではなく「自分がやろう」と動かれた結果、東近江の眠っていた資源が「資産」になったんだと思います。

「資産」という考え方

そういう素材（資源）が今に残っているのは、さっき言いました旅ブームの頃に滋賀が目されなかったお陰だと私は思っておりまして、当時、旅行者・マスコミに注目されていたら滋賀県は無茶苦茶にされていたらと思うんです。だからその頃無視されてすごいラッキーだったと思っているんです。あの高度経済成長のさなか——語弊があるかも知れませんが——モノの値打ちについての考え方が非常に未熟だったと思います。そういう中で沸き起こった旅ブームのなか、「観光で活況を呈するならば」ということで独自の文化を捨ててしまった町や村がたくさんありました。皆様もその頃、ブームになった町へ旅なされて「なんだこれは??」と思われた所も沢山あったと思われます。幸か不幸かそういう時代に滋賀に注目が集まらなかった。そのお陰で、滋賀は旅行者の嗜好に合わせて近江独特の文化を捨てずに済んだのです。

最近滋賀が目されるようになってきたのは、この滋賀に「近江」という文化が残っているからだと思っています。八日市に15基もの掩体壕が残っていたのも、40～50年代の開発の波に飲まれなかったお陰だと思うんです。日本遺産に近江の水文化が認められたのも、この近江が歩んできた長い歴史と、琵琶湖が作り出した暮らしの文化・先人達の思い、そういったものが今もちゃんと残っている、ということが評価されたわけですから、今を生きている私たちはこれを次の世代に渡してあげてを考えるといけないし、その責任があると思います。

文化とか、風土、歴史遺産、そういったものをひっくるめて私たちは今まで「観光資源」とか「地域資源」という言い方をしてきました。地域の素晴らしいもの、観光の素材になるもの、それをそう呼んでも何の不都合もないんですけ

れども、私たちマスコミの人間の間では「この言い方そろそろ考えてみいひん？」と言い出しています。「資源」ではなく、「資産」という言い方に変えていこうとしています。「地域資産」「観光資産」です。「資産」というのは、「金銭に見積もることが出来、生活や事業の資本となる有形・無形の財産」という意味です。一方「資源」というのは、「自然によって与えられるもの。技術の発展に伴って生活に役立つようになるもの」です。私たち観光ジャーナリストの者たちから「資産という言葉を使っていかがへんか」という提案が出ましたのは、観光において「資源」と言っている間は「受身」ではないか、ということからでした。つまり、「活かせる資源がまずなければ、観光にはならない」ということ。しかし実際には観光というものは——さっきの中崎町の例のように——何もなくても「人」さえ居れば魅力を作り出すことができるものです。もちろんその人はこの土地が大好きで、やる気のある人でなければいけないですけれども。人が関わることで、何にもないと思われる所にも魅力を生み出すことができ、そこにストーリーも自ずと出来る、——楽観的ですが——「資産」も増えていく、というような考え方です。

知恵を出して汗をかく

で、「資源がある」というのは大変ありがたいことですが、ただ「資源」とは限りあるものです。資源に頼っているだけではいずれ枯渇してしまいます。見つけ出して、磨いて、そしてその資源を「資産」にしていかなないと先細りになってしまいます。つまり大きくするためには「活用」「運用」をしないとイケないです。観光・地域興しの議論のときに、よく「あれもない」「これはできない」とマイナス要因ばかりを並べるところもあるんですけども、それではやっぱり物事は動かないんですね。以前、北陸のある町で観光振興の話し合いがありましたときに、メンバーにいらした30代半ばのお嬢さんが「この町は何にもないんですけども、暖かい心だけはどこにも負けません」と仰ったんですね。年齢を重ねた私のようなおばさんにしますと、いくらか気恥ずかしい言葉だったんですけども、でも聞いていて「本当にそうなんだよね」と思いました。何にもない、ということはないんです。今更ながらに教えられた思いでした。「何にもない」「何にもできない」のではなく、「何ならこの町にあるんだろう」「何なら私たちに出来るんだろう」を考えることが前に進む力になると思います。地域の活性化というのは、知恵を出して汗をかく、そして誠実な心で対処する、ということに尽きるのかなと思います。観光は単に地域にあるもので良いと思うんです。その価値を、地域の人が発見して、磨いて、運用（発信）して「資産」にしていくことだと思います。そのときに「そんなん誰かがやるやろ」ではなく、皆でやらないと動きません。小さな力でも動いている間はやっぱり錆びませんし、「地域が動いている」それこそが地域の魅力ですし、その魅力というのが人を惹きつけるものになると思います。滋賀には良いものがいっぱいあるのに「魅力がない」とか「ブランド力が弱い」ということがよく言われます。これは私から言わずと、まさに「運用の仕方に問題がある」か、誰かがやるやろとって「運用を怠っている」からだと思います。

地元の人が町をつくる

地域の資産・観光の資産をどうやって運用していくか。つまり、活用をして、次に金銭的・精神的豊かさ「富」を生み出していくか。これは、一部の人ではなくて県民の知恵が求められてくるかなと思います。具体的にどうしたらいいか、ということですが、これは地域振興に雛形は無いです。地域々々にそれぞれ個性がありますから、同じようにやって上手くいくとは限らないんです。ただひとつ、「これだけは絶対だ」と思うのは「人」です。その地域に暮らしている地元の人が知恵を出し合って、地域の資源を資産にしていく。その出来る「人」が、どこの市町村にいても共通の力だと思います。先ほどご紹介した大阪の中崎町なんかがとてもいい例だと思うんですが、滋賀にも、その見本

の町があります。長浜とか、近江八幡とか、地元の人々の知恵が今の町をつくってきたと思っています。北陸の30代のお嬢さんが「何もないけど暖かい心だけはどこにも負けない」と仰った——「暖かい心」ということではなくて——そういう発想の出来る人を育てていくのがまず大事だと思います。地域の中で、次に続く人たちを育てたり、見つけたりすること、それも地域資源を地域資産にしていく道であり使命であると思っています。観光資源・地域資源をどう活用するかは、まず皆様自身が滋賀の良いものを知って、認め、語っていくことだと思います。そして「地域の人たちとその思いを共有していくこと」それが資源の活用を考えるうえでとても大切なことだと思っているんです。

今日ご紹介致しました「日本遺産 びわ湖とその水辺景観…」、これについても、観光関係以外の方で（認定されたエリアを）言える方がどれだけいらっしゃるだろう、と思うんです。日本の国の中でたった18の内の1つに選ばれているのに、滋賀県の方は言えるだろうか、と思うんです。そして、「琵琶湖八珍」というのも選びました。皆さん琵琶湖八珍という名前は知っているんです、でもそれにどんな魚が入っているか、言える方いらっしゃるのかなと思うんです。ちょっと時間あるからいいますと、これの覚え方を水産課の方に教えていただきまして、「びわこは、ほんにえいよ」と覚えると良いそうです。「びわ」はビワマス、「こ」コアユ、「は」はハス、「ほん」ホンモロコ、「に」ニゴロブナ、「え」は海老ですよねスジエビ、そしてイサザ、ヨシノボリ。これを覚えていると言えますので、お子さんたちに教えてあげてほしいと思います。ちょっと余談でしたが・・・。とにかくね、まず滋賀の魅力を知ることが第一です。併せて、「その資源の力を引き出してやれる人材を育てること」も大切な方策のひとつです。

人を育てる

話が飛ぶんですけど、東北の「会津藩」皆さんも御存知だと思います。幕末、天皇を守って幕府に忠誠を尽くす、という相反する二つの使命に挟まれて、悲惨な滅ぼされ方をした藩です。ずっと遡れば、この近江から移された蒲生氏郷がつくった国でもありました。その会津藩で18世紀、打ち続く大飢饉で藩内は餓死者がいっぱい出てきて、藩政もすっかり崩れてしまった時があります。そのとき、藩の家老だった田中玄宰という人が国を立て直すために何をしようかと、「経済の立て直し」ではなく、「人材を育てること」に着手しています。経済の立て直しより先に考えたのが、人を育てることだったんです。そして実際藩政を立て直しています。この考え方は、幕末の長岡藩でもありました。小泉純一郎さんが2002年の内閣発足時、所信表明の結びで引用された「米百俵」の故事。窮乏の中にあつた長岡藩に、百俵の救援米が届くんですが、そのとき小林虎三郎という人が「これを今食べてしまったらすぐ無くなってしまう。教育に当てたら明日の千俵にも万俵にも成る」と言い、皆の反対を押し切ってお米を売ってしまい、そのお金で学校を建てました。学校を建てて、人材を育てたんですね。

「人材」というのは、会社や家庭、もちろん学校でも育てていけないといけないんですが、社会や地域でも育てていけないといけないと思っています。個人が力を発揮して生きやすいような地域を作る。大阪の中崎町のように企業も一緒になって人材育成をすることで、その会社自体も地域から認められてくる。会社で働く人も「ああこの会社の社員で良かったな」と思うかも知れない。そんな活き活きした会社や社員を見ていたら、子供達・若い人たちもまた「おお、地元で働くのもええもんやな」と思うかも知れない。地元の資源の、何よりの活用だと思うんです。近年、地方創生が急務と言われています。価値観が多様化してきている今こそ地方が伸びていけるチャンスだと思うんです。何でもあり、色々な方法が出来るということです。そのための資源を、滋賀県は本当にいっぱい持っている所です。資源を資産にしていくためにはつまるところ、そういう力と知恵を持った「人」を育てていく、そしてそういう人を育てられるリーダーにも存在してもらえないといけない。

ちょっと途中で言いましたが、「観光振興」と「地域振興」は似てはいるんですけど違うものです。観光振興というのは観光客増加に確かに繋がるとは思います、だからといって必ずしも地域が生き活きた町になるとは限りません。ですが地域振興というのは、地域の皆さんが生き活きてくるために成されるもので、「あんなに生き活きている町はええなあ」と言って他所の人たちも寄って来んです。観光客とか旅人とか、そういう人たちがやって来る、やって来て「こんな町に住んでみたい」と思うかも知れない。

長浜の振興の一番最初というのは、観光振興ではなくて地域振興でした。冬の長浜の町というのは、昔は鬱陶しかったと思うんですね、「こんな町、どっかへ逃げ出したいわ」と誰かが言わはったみたいですね。その一言で、「そんなことではアカン。住んでる人間が逃げ出したいような所に誰が来るねん」というところから「まず町の人たちが誇りに思うような町にしよう」と言って動き出されたのが、長浜とか木之本で旅館をされている方たちでした。私も取材に行くと、土地のことだけではなくて、ご自信のふるさとへの思いを延々と聴かされました。そういう人たちがやっぱり必要だと思うんです。この人たちは、口で言うだけじゃなくって、本当にすぐ動いてらっしゃいました。私が「〇〇は何処にあるんですか？」と言うと「ほな行きましょう」とか言ってすぐに車を動かしてくださいました。「地域振興をまずしよう」と思われたところに今の観光客が沢山来るような長浜が出来たんです。

地域が輝くことで、文化を次代へ伝えていけると思っています。地域を輝かせるためには、地域資源を地域資産にしていく、人をまず育てることかなと思います。どうぞ、次に続く人を育てていって頂きたいと思ひますし、私たちもそういうことには協力していきたいなと思っております。

長い時間どうもありがとうございました。